

## 二〇二五年度入学試験問題

## 国

## 語

(六〇分)

## 注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子は開かないでください。
- 二、この問題冊子は24ページあります。試験中、ページの脱落等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 三、解答用紙(マークシート)の汚れなどに気づいた場合も、同様に知らせてください。
- 四、解答は、すべて解答用紙(マークシート)に記入し、解答用紙(マークシート)の枠外には、なにも書かないでください。
- 五、解答番号は、1～40まであります。  
解答用紙(マークシート)には、問題番号が1～50、選択肢が①～⑩まで印刷されていますが、解答にあたっては、各設問に指示された選択肢の数の中から選んで解答してください。
- 六、マークは必ずHBの黒鉛筆を使用し、訂正する場合は、完全に消してからマークしてください。
- 七、監督者の指示に従って、解答用紙(マークシート)に解答する科目・受験番号をマークするとともに、受験番号および氏名を記入してください。
- 八、解答する科目、受験番号、解答が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 九、試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

## 問題一

「私」は、八月のある日、檜ひのきを見に訪れた森林で二本立ちの老樹に出会った。うち一本は傾斜しており、そのように歪ゆがみや曲がりのある部分は「アテ」と言つて製材業者からは嫌われるものだと同行人に聞かされる。「私」は、優良材とされる「ひのき」にも、人間に嫌われるものがあることに驚くと同時に、苦勞して育った木が厄介者で役立たずのように扱われることに納得できずにいた。以下は、「私」が、なぜ「アテ」のある檜がよくないとされるのかを製材所で実際に見せてもらうことになった場面である。次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

この頃、とかく思うことを押し通そうとして、我を張ることが多くなつた。もう持時間もちじかんは少ない、と思いはじめているものだから、今日の機会をせっかちに追う。またの折に、といつていたこれ迄までのゆとりはなくなつてしまつた。多少の強情はまつびらご免、といった気が起きること、実にしばしばである。このたびただいま見ておかなければ、二度とアテがどう悪い木なのか、どう厄介者なのか、見せてもらふ折はない、と思われた。それにかりに、またもし来年、もう一度機会があつたとしても、その一年の間に自分は更に老いてしまつて、アテの背負せおわされた業を切り開いて確かめようとする、そんな氣力はもう失つてゐるかもしれないのである。強引aに承知させなければならぬのだつた。

しかし、アテが都合よく、すぐその場にころがつてゐるわけではなかつた。適当な材をさがすあいだ、一旦歸京して通知を待つてくれ、という。同じことなら、癖の強いのを挽ひいて、よく納得してもらわなくては、こんな特別注文に応じる甲斐かいはない、という。無理に押しつけにされて、迷惑のあまり、腹をたててそういつてゐるのではない。私がアテをかわいそうがる故に、こんなにしてアテの業をつきとめようとしてゐるのだ、ということをも山の人によくわかつてくれたのだつた。

「材木だと思わないから、アテなんて、これまで心にかけたことはなかつたが、いわれてみれば木も人間も、生きるにちがうところはないかもしれない。アテを哀れといわれれば、身につまされるおぼえもあるよねえ。すんなり暮しちやこなかつたんだ。」

この一言をきいて、私は歸京して待つことに、疑いをもたなかつた。この人はかならず、約束を反故ほごにしない、と安心した。

その通り、待ちくたびれないうちに、通知がきた。行くと、製材所では作業場の構かたいの外にまで、製材所特有のキーンという鋭い騒音（注）がはみだしてゐた。音階はかなり高く、音いろにきつい緊張がある。おびえを感じさせる断続音だつた。思わずあたりを見まわすと、けいとうが濃く燃え、コスモスが淡くゆらぎ、桜もみじが散りかかり、その上は針葉樹の暗い林が、急傾斜でのぼつてゐる。まっかな午後の陽ひがはなやかで、平穩な美しい秋景である。だが、その陽光には温度というものがなくて、まるで嘘うそのようにただ赤々としてゐるばかり、しんしんと背筋から冷えてきて、鼻の先から無感覚にはなみずがたれ、麻のハンケチが痛い。製材の音響と、平和な風景と、

強い冷込みとが、都会ものには印象ふかった。

材はすでに樹皮を去り、屋内に運びこまれており、製材デッキに乘せるばかりに、段取<sup>だんどり</sup>されていた。二百年はたつぷり生きてきた木だから、年輪を数えてごらん、といわれたが眼鏡はくもるし、寒くてそんなじつとしたことなど、できるものではなかった。ただ、樹芯が、思いのほかの片寄ったところにあるのを見た。アテであるしるしである。この木、根元近いところで、最初の困苦をふみこたえた、と察した。しかし見たところ、これという節<sup>（注2）</sup>やうろはなし、芯の片寄りがどれだけ幹をアテにしているのか、表面からは皆目<sup>（注3）</sup>わからない。ゆがみやねじれとわかるような難点はない。アテ材はなめらかな素肌をのべて、静かに横たわっていた。果<sup>はた</sup>してこの体の中に、人のいう「どうしようもない、ちの悪さ」があるのか、とうたがう。

ということは、アテの木というものが、よそにはすぐに察しのつかないような、微妙にいり組んだ苦勞を重ねながら、生きてきたということなのだろうか。ということは、木というものが、外側を A ことのできるものだということであり、同時に、木は一度傷をうけると、終生その傷のいたみを、体内に抱えて暮すものだということになるだろうか。木は中心から肥え育つものでなく、つねに外へ外へと、新しく年輪をふやすことによって育つ、と教えられたのはこのことと思う。外へ外へと新生するから、傷も、傷に連鎖して生じた狂いも、年月と共に内へ内へとくるものだろう。くるむ、とはやさしい情をふくむことである。中身をいたわり、庇<sup>かば</sup>い、外からの災いの防ぎ役もかねるのが、くるむということ。生きているものは人も鳥けものもみな、傷にはくるみを要する。木も当然そうする。くるんで、庇<sup>かば</sup>って、変形を補って、そして成るべくは無傷の木と同じく、丸い幹に仕上げていこうとする。アテ材が素人目には、一見なめらかな肌をのべて、良材とさして目立つ変りなくみえるのは、人を偽るのではなくて、それより他ない自然の理<sup>ことわり</sup>によるものなのだ、とおもう。

では挽きましよう、といわれた。いつか製材の音がぴたりと止<sup>や</sup>んでいた。工場の今日の予定を一時中断して、アテの製材をみせてくれるのである。簡単にいえば製材は、材を中にして、二つのデッキがあつて行われる。一つは固定したデッキで、ここに動力で廻<sup>かへ</sup>転するノコ<sup>（注3）</sup>がついている。もう一つのは進退両様に移動のできるデッキで、これには作業員が乗る。材はあらかじめ木取るべき寸法がきめられ、寸法に従った位置におかれ、刃物の前へ、これも動力によって押し進められ、所定の通りに切断され、切断されたものは待ちうけている作業員によって、それぞれ片付けられるという仕組みである。

作業員が三人、移動デッキの位置についた。長い鳶口<sup>（注5）とびくち</sup>をもっている。いつも材を扱うのにはこれを使うのだそうだが、万一挽いている材が、ひどく反り返ったりすればあぶない、その時素手ではどうにもならない、という。それにアテは、裂けることもあるし、裂け

て飛ぶようなこともないとは限らず、そんな時の用心のためともいう。それほどまで、アテは猛々<sup>f</sup>しいのかと、暗い気持ちになる。

やがてスイッチが入って、材は前へと動き、材の丸さの七三のあたりに、最初の刃がふれると同時に、キーンという B が起きて、あつけなく易々<sup>やすやす</sup>と、第一回の切断が終った。反りも歪みもしなかった。予告されていたような、アテのあばれはなかった。そういううちにも、材と移動デッキとは元の場所まで戻された。いま切った断面を職長<sup>g</sup>があらためる。木の目は前もつての見込み通りだったようである。だからすぐ、はじめの予定をかえることなく、今度は厚板をとる。これもどうということなく済んだ。けれども、もうその面はそれが限度で、あとは取れない、いまの板も、長さをそのままでは売りものにならず、やがて反ってくるであろう悪い部分を切りすて、短尺にするしか通用しない、という。

面をかえて、また板をとる。こんな太い材なのに、なぜ柱をとらないで板ばかりなのか、と問う。柱<sup>h</sup>なんか思いもよらない、板をとるのは、ちつとでも役に立つようにしようと思うからこそだ、まあ、見ていてもらいたい、アテなんだから——ほら、もういけないやな、という。半分まで素直に裁たれてきた板が、そこからぐうつと身をねじった。裁たれつつ、反<sup>h</sup>りかえった。耐えかねた、といったような、反りのうちかただった。途中から急に反ったのだから、当然板の頭のほうは振られて、コンベヤを一尺も外へはみだした。すべて、はつと見ている間のことだった。

「<sup>i</sup>な、わかつたら。アテはこうなんだ。だからワルなんだ。」

なんとかできないのか、この板を。いま反ったばかりなのだから、矯められるのではなからうか、とあせるようなセカセカする気があつて、反った所を掴<sup>つか</sup>んだ。固かった。掌など、退けてしまうように、固かった。手出しができない、ときらわれている癖の固さが、これなのだろうか。アテのワルがここに曝<sup>さら</sup>されていた。目の前に、等外品の反りと固さが示されていた。でも、仕様がな、とはどうしても思えなかった。人は蔑視や厄介だけでアテをいうが、それだけでは承服できないなにかがあつて苛<sup>いら</sup>立<sup>だ</sup>った。

もう一度、挽いてみせる、という。材はもうだいぶ切りとつたから、瘦せていた。

たぶん最もよくない部分が、残っているのだろうと察しられた。スイッチが入って、材は刃へ進む。切る鋭い音。と、材は抵抗した。ガッガツと刃を拒絶して、進もうとしない。が、材は勝手に後退は、できないようになっていく。刃もまた廻転を止めない。誰もみつめていた。殺気とはこんなものか、刃物への恐怖、素手でむかつた凄<sup>すこ</sup>さ。それは刃にも材にも、戦いだった。ガッガツという抵抗音。材がさからつていて、刃はさからわれているもののようにみえた。微少な差がものをいつていた。スイッチがとめられた。刃の入った部分に、くさ<sup>注1</sup>びが打込まれ、くさびを打つ音が胸にひびく。切口がひろげられた。スイッチが入る。それでもまだ材は、抵抗して刃を嫌った。二度、三度。そして、刃は通った。すうつと切れていった。切れていくかに見えて、人がゆるんだその時、またガツと高く歯

向って、瞬間、材はさつと二つに、斜めに裂けて、小さく裂けたほうが裂目を仰<sup>のけ</sup>に向けて、ごろんと、ころがった。その場がしんとした。一斉におごそかな空気が包んだ。たまらなくて、裂けたもののそばに膝をついた。自爆したみたいな、その三角に裂けたアテは、強烈な、檜の芳香を放っていた。裂けた木の目は、あぶらをたくさんに含んだうす紅の色沢で、こまかい木目を重ねていた。だが、抱けば、その頑<sup>かた</sup>くな重量。このアテをどうしたらいいかただけ、あとは何も考えられなかった。

(幸田文「ひのき」による)

(注) 1 けいとう……夏から秋に、ニワトリのときかに似た花をつけるヒユ科の一年草。

2 うろ……幹や太い枝にできた空洞。

3 ノコ……ノコギリの略。

4 木取る……形を整えて切ること。

5 鳶口……棒の先にくちばし状の鉤<sup>かぎ</sup>を取り付けた道具で、木材を積み上げたり運んだりするときに用いるもの。

6 コンベヤ……回転したベルトなどの上に物をのせて一定の距離を運ぶ装置。

7 くさび……木や金属でつくった三角形の道具。

## 問一

傍線部 a 「強引に承知させなければいけないのだった」とあるが、「私」がこのように思った理由として正しくないものはどれか。次の 1～4 のうちから適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 1。

1 この機会を逃したら、もう二度と「アテ」がどう悪いのかを実際に切って見せてもらうことはできないと思ったから。

2 「私」にはあまり時間が残されておらず、多少強引であってもこの機会を逃すわけにはいかないという思いがあったから。

3 「アテ」を切るという無理難題を押しつけたばかりに厄介者扱いされ、なにがなんでも見せてもらうしかないと思地になっただけから。

4 もし今後機会があったとしても、そのときには今のよう「アテ」の業をつきとめようとする気力が残っていないかもしれないと思ったから。



問二

傍線部 b 「適当な材をさがすあいだ、一旦帰京して通知を待ってくれ」とあるが、「私」がこの条件を快く受け入れたのはなぜか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。 解答番号は 2。

1 「アテ」について調査する時間が残り少なく、多少の強情を通してでも願いを叶えたいという気持ちを相手が理解してくれたようだったから。

2 相手の返事は不承不承でありながら、すぐに手ごろな「アテ」が見つかるわけではないという筋が通ったものでもあり一応納得がいったから。

3 「アテ」を使い物にならないと決めてかかるのはどうかという「私」の主張を聞いたうえで、相手が考えを改めてくれたことがわかったから。

4 「私」の考えを真面目に受け止める相手の態度から、自分の「アテ」に対する強い思いに正面から向き合おうとしてくれていることが伝わったから。

問三

傍線部 c・e・g の語句の本文中の意味はどれか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 解答番号は 3 5。

c 「身につまされる」

1 反省をうながされる

2 思いがけず驚かされる

3 痛い思いをさせられる

4 他人事でなく思われる

e 「皆目」

1 まったく

2 注視しないと

3 おしなべて

4 すぐには

g 「あらためる」

- 1 手直しする
- 2 新しくする
- 3 吟味する
- 4 指摘する

問四

傍線部 d 「二百年はたつぷり生きてきた木」とあるが、この木材を見て「私」はどのようなことに思い至ったか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 6。

- 1 アテ材の表面はなめらかで節やうろなどの目立った欠点もなく、人がいうほど出来の悪いものではないということ。
- 2 アテ材が昔にできた歪みを内部にはらんだまま、人知れず厚みを重ねながら今日まで形を整えてきたということ。
- 3 アテ材が長い年月をかけて年輪を増やしながら、樹芯近くの傷を徐々に回復させて立派に成長してきたということ。
- 4 アテ材が自然の知恵で人の目をごまかし、内側に負った傷を樹皮で覆い隠すことにより守り続けてきたということ。

問五

空欄 A

に入る語句はなにか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 7。

- 1 さりげなく繕っていく
- 2 たちどころに修復する
- 3 ひたすら保護し続ける
- 4 つねに内側の側におく

問六

傍線部 f 「それほどまで、アテは猛々しいのかと、暗い気持になる」とあるが、このときの筆者の心情はどのようなものか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。 解答番号は 8。

- 1 道具まで用意して三人がかりで構える作業員たちを見て、いくら「アテ」とはいえ木材を挽くにしては大げさだと思っている。
- 2 緊張感のある作業員たちの表情を読みとったことで、「アテ」は危険な木材かもしれないという疑いが確信に変わりつつある。
- 3 万が一に備える作業員たちの様子を前に、自分はとても危険な作業をお願いしてしまったのではないかと後悔し始めている。
- 4 用意周到な作業員たちの様子から「アテ」の扱いにくさが推し量られ、「アテ」に対して抱いていた望みを失いかけている。

問七

空欄 B

に入る語句はなにか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。 解答番号は 9。

- 1 重厚な音響
- 2 甲高い音響
- 3 野太い音響
- 4 か細い音響

問八

傍線部 h 「柱なんか思いもよらない」とあるが、それはどのようなことか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。 解答番号は 10。

- 1 これまで「アテ」は粗悪で使い物にならないと決めつけていたため、柱をとるなど考慮すらしなかったということ。
- 2 反りができやすくて板ですらなんとか工夫してとっているため、柱をとるなどはじめから話にならないということ。
- 3 少しでも役に立てばましたと消極的に考えていたため、柱をとるなど大胆な発想をしたことがなかったということ。
- 4 板をとるだけでも危険を伴う大変な作業であるため、柱をとるなどあまりに危なくて絶対にしたくないということ。



傍線部 i 「な、わかつたろ。アテはこうなんだ。だからワルなんだ」とあるが、反った板を前に「私」はどのような気持ちでい

11

る。

授業でこの文章を読んだ生徒たちが、  
 の部分の表現について次のように感想を話し合った。傍線部1〜5のうち、

解答番号は 12。

ね。

うだね。

づけているね。

容しているね。

問一

この文章の著者である幸田文は、近代に活躍した小説家、幸田露伴の娘である。幸田露伴は、擬古典主義の作家として、同時代の小説家、尾崎紅葉らとともに文壇の一時代を築いたとされる。この幸田露伴の代表的な著作はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は

13。

1 金色夜叉  
こんじきやしゃ

2 五重塔  
ごじゅうのとう

3 高野聖  
こうやひじり

4 山椒大夫  
さんしょうだゆう

## 問題二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

モータリ化しつつある都市空間を、私たちはどのように経験しているのだろうか。その経験の特質は、かつての盛り場を典型的なあり方とする都市経験のありようと、どのように違ってきているのだろうか。この変容は、さまざまな観点から描きだすことができるだろうが、ここでは、ひとつのシンプルな見取り図を与えるために、つぎのようなポイントに着目してみよう。すなわち、都市経験における消費の役割と、そこにカンヨ<sup>a</sup>する実存の水準のかかわり方に注目しつつ、一九七〇年代から八〇年代に典型的であった都市経験のありようを準拠点に、現在の都市経験への変容を、実存と消費の癒着から両者の乖離<sup>かいり</sup>へ、というかたちで描きだすのである。

かつて都心への憧れは、何者かになりたい、という、実存にかかわる切望と深く結びついていた。魅力的な盛り場を訪れる人びと、とりわけ若者は、それぞれ自分が何者になりたいのか、何者として見られたいのか、等々の、持ち重りのする実存的問いを抱えて盛り場にやってくる。そうして、自分の生に固有の可能性を、その街でのふるまいのなかで実現しようという信念を強固にもっていた。そこで働いていたのは、一方では主体性やアイデンティティという実存を刺し貫く垂直的な軸であり、他方では、そうした固有の軸を集合的に連接させつつ差異の体系へと流し込むことで、人びとを消費社会のゲームへと巻き込んでゆく水平的な軸である。他の誰でもありえない実存の問題が、他の誰でも同じものが購入できる消費の問題と、ぴつたりと重なりあう。それが、かつての盛り場の経験を支える基本的な構図であった。

(中略)

都市的状况では、自分の価値が、自分の存在の核が、他者のまなざしに依存する。服装や持ち物であれ、肩書きや出身地であれ、ごく A な要素でもって、自分がどういう存在であるかが判断されてしまう。そのように外的な手がかりで内面や人物が測定されてしまう以上、主体の側としてはその条件を逆手にとって、外的な手がかりを自覚的に操作することにより、自分の評価そのものを操作してやろうとする。それがつまりは演技というパフォーマンスであり、演技がくり広げられる盛り場は、舞台ないしは劇場となる。

けれどもそこに逆説<sup>b</sup>が生じる。つまりそのとき、他者の視線を欺くために操作をしてやろうとするまさにその主体的意志をつうじて、主体は、都市の思うつぼにはまってしまう。誰もがうらやむモノや衣服や肩書きをそろえて、理想的な自己イメージを実現しようとするればするほど、誰でもないその人ではなく、誰でもありうる凡庸な都会人になり果ててしまう。そうして実存はすり切れ、ヒ・ヘイ<sup>c</sup>してゆく。他者のまなざしにおびえつつ、自意識を剥きだしにしてがむしやに自己を主張しようとすればするほど、内面は空虚になってゆく。こうした状況が、見田<sup>(注1)</sup>が生々しく描きだした「まなざしの地獄」としての都市であった(見田 一九七九)。

見田が描きだしたのは六〇年代末の都市的状況だが、この構図はそのまま、より高度に消費社会化した、七〇年代から八〇年代にかけての都市空間の経験にも引き継がれる。記号消費の論理を意識的にとりいれた資本が、街の改変に乗り出し、たとえばパルコが開発した渋谷では、ごく平凡な道路が「公園通り」「スペイン坂」と意味ありげな名前をつけられ、**B** 街灯やゴミ箱やベンチなどストリートファニチュアを整備することで、それらしい舞台として仕立てあげられていった（吉見 一九八七）。

そんな舞台としての街を闊歩する人びとは、記号としてのアイテムをそろえて、なりた「私」を演出するようになる。たとえば女性のカフェで飲み物を注文するときに、知的な「私」を演じたいのならブラックコーヒーを、かわいい「私」を演じたいのならミルクティーを頼んだりすることがあるだろう。こんな風に、そのときどきの理想的な自己イメージを演出するアイテムとして、個々のモノを消費するのが記号消費だが、舞台としての盛り場では、それぞれの衣服や持ち物が、自分のアイデンティティを表示する記号として働く（ボードリヤール 一九七九）。そのとき、どんなアイテムがどんな記号として作用するのか、その最新のコードを学ぶ教科書となり、街でのふるまい方を学ぶ台本ともなるのが各種の情報誌である。七〇年代から八〇年代にかけては『an・an』や『ぴあ』など、情報誌がコウリユウを迎えた時代でもあった。これらの教科書や台本にしたがい、最新のコードに見合った記号としてのアイテムをそろえ、おしゃれとされる街に出かけて「〇〇な私」を演ずること。それがこの時代の都市経験のひとつの典型だった。

華やかな記号消費がくり広げられる舞台としての都市。それは見かけ上は軽やかできらびやかだが、しかし、そこには同時に切実でときに痛々しい、自意識やアイデンティティが賭けられてもいた。理想的な自己イメージを首尾よく演じられているだろうか。街のコンテキストに見合った最新のコードにきちんとしたがつているだろうか。周囲の人びとに馬鹿にされてはいないだろうか。そんな風に他者の視線をたえず意識し、セルフモニタリングを強迫的に反復するとき、華やかな舞台は、過酷な「まなざしの地獄」へと容易に反転する。それは、見かけの軽やかさとは裏腹に、たえざる緊張を要求する空間であり、遊び心にみちた記号の戯れと、切れば血の出る実存の重みとが、互いに結びあう空間であった。舞台としての都市にあつては、そのようにして実存と消費がぴつたりと癒着しあつていた。

だがモル化する都市空間にあつて、そうした重々しい実存の問題はいつの間にか蒸発してゆく。商業施設での消費はくり返されるとしても、もはやそこに切実なアイデンティティが賭けられることはない。実存と消費は、都市経験において乖離しつつあるのだ。そうした両者の乖離には、ひとつには、電子メディアの高度な発達によるネット空間の肥大化が深く関連しているだろう。とりわけモバイル情報端末とSNS（ソーシャルネットワークワーキングサービス）との組み合わせは、若者のアイデンティティや自意識が賭けられる主

要なフィールドを、都市の現実空間からネットの仮想空間へと移し替えていく。ブログやミクシィ(注6)を経て、ツイッターとフェイスブックへと展開してきたSNSは、リアルとネットの両方の人間関係をフラットな状態で混ぜ合わせ、相互にリンクし、フォローや「友達」をひたすら増やしていくなかで、日常の近況をたえず互いに報告しあい、それについてのコメントを交わしあう状況をつくりだしている。

自己呈示と、それにまつわる情報の「C」のゲームがくり広げられる主要なフィールドが、ネット空間に移行しつつある以上、「街」を歩く人びとは、いつてみれば気もそぞろで、実身体は「街」を歩いていながら、自分のアイデンティティにかかわる領域は、ポケットやバッグにおさまっているモバイル情報端末のほうにある。実存の重みは仮想空間に置いておき、身も心も軽くなった端的な消費する身体として、モル化した「街」を歩くのだ。そうして訪れた話題のレストランやカフェでは、料理や飲み物が出てくるやいなや情報端末で写真を撮り、SNSにアップロードして他者の反応を待ったりする。そのとき都市空間は、自己呈示が戦わされる舞台から、ネット空間で交わされるゆるいコミュニケーションのための、めばしいネタが拾われる現場へと、その役割が転換している。都市空間は脱舞台化し、アライバ化しているのだ(北田(注7) 二〇〇二)。

モル化する都市空間では、舞台の緊張感も失われ、消費の現場は脱力した惰性の空間となる。他者の視線などもとくに意識することはない。それぞれがそれぞれの存在を何となく認知しながら、とくに「カン」シウせず、何となくお互いにやり過ごしているのだ。モル空間では、主体性やアイデンティティが問われないぶん、消費は、自意識の問題系が解除されたかたちで、いわば純粹な消費となる。演技のための消費ではなく、消費のための消費となるのだ。そのとき消費者は、自己のたえざるモニタリングへと駆り立てられる意識の主体というあり方を脱して、なかば無意識的な惰性でもって商業空間をうろつく、消費する身体と化する。ぼんやりと脱力し、弛緩しながら「マンゼン」とさまざまな消費装置が提供するモノやサービスを楽しむ、実存抜き消費する身体。そんな消費者にとって、快適で便利な消費装置の集合体であるモル化した都市空間は、まさにうってつけの環境だ。

モル化する都市空間は、二通りに評価できるだろう。一方では、切実な自意識の問題と結びあう演技や舞台の緊張感が失われ、すっかり腑抜けてしまった、墮落形態とみることができる。他方、余計な意味づけやら実存の重みやらから解放された、消費空間の滑らかな快適な洗練形態とみられることもできる。そしてそれを墮落とみるか洗練とみるかで、評価する側が「都市的なもの」という基準をどこに置いているかが、透けてみえることになる。

前者は、モル化によって失われる何ものかに「都市的なもの」の原型を認める立場である。かつての魅力的な盛り場こそが、都



市の都市らしさを感じさせる「本物」なのであって、モールの仕立てられた空間などは「偽物」であり、フェイクであり、模造品にすぎない、という見方だ。対して後者は、増殖しつつあるモール空間のほうに、あらたな「都市的なもの」のあらわれを認める立場である。そうした立場からすれば、かつての魅力的な盛り場などに「本物」を求めるのは、古き良きものを称揚するノスタルジーにすぎず、一見するとフェイクであり模造品であるモール空間にこそ、現在の都市空間のリアルがある、ということになるだろう（近森・工藤編 二〇一三）。

（『現代文化を学ぶ人のために』所収 近森高明「都市文化としての現代文化」による）

（注） 1 見田…社会学者の見田宗介（一九三七～二〇二二）のこと。

2 パルコ…ファッションビルなどを経営する会社。

3 ストリートファニチュア…街路に設置される備品。

4 吉見…社会学者の吉見俊哉（一九五七～）のこと。

5 ボードリヤール…フランスの社会学者のジャン・ボードリヤール（一九二九～二〇〇七）のこと。

6 ミクシイ…二〇〇四年にサービスを開始し流行したSNS。

7 北田…社会学者の北田暁大（一九七一～）のこと。

8 近森・工藤編…近森高明・工藤保則編『無印都市の社会学——どこにでもある日常空間をフィールドワークする』による。

問一 傍線部 a・c・e・i・j と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマ

クしなさい。解答番号は 14 18。

a 「カンヨ」

1 ヨ|インにひたる。

2 ヨ|夕話を信じる。

3 ヨ|センを通過する。

4 エイヨ|をたたえる。



c 「ヒヘイ」

- 1 キユウヘイを打破する。
- 2 ヘイソク感が漂う。
- 3 シヘイを発行する。
- 4 ヘイセイを装う。

e 「コウリュウ」

- 1 小さなリュウシ。
- 2 バスがテイリュウする。
- 3 茶道のリュウハ。
- 4 地面がリュウキする。

i 「カンショウ」

- 1 時には諦めもカンヨウだ。
- 2 船のカンパンに出る。
- 3 沼をカンタクした土地。
- 4 イツカンして否定する。

j 「マンゼン」

- 1 キョマンの富を得る。
- 2 マンガを読む。
- 3 コウマンな態度。
- 4 ごマンエツの表情。

問二 空欄 A

に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 19。

- 1 表層的
- 2 一般的
- 3 具体的
- 4 総合的

問三 傍線部 b「逆説」とあるが、それはどのようなことか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答

番号は 20。

- 1 他者が理想とするものに価値を置くことによって、自分がそれを望んでいるかどうかにかかわらず、他者がうらやむものを選択するようになってしまふということ。
- 2 他者からの視線を過度に気にすることによって、個性を主張することは二の次になり、周囲から浮かないよう無難なものばかりを選択するようになってしまふということ。
- 3 自分の評価を他者に委ねることによって、他者とは違った自分を演出しようという意図とは裏腹に、型にはまった自己像を追求することになってしまふということ。
- 4 他者から理想とされるような自分を目指すことによって、個性を主張することが目的だったが、実際の自分とはかけ離れたイメージを追求することになってしまふということ。

問四 傍線部 d「七〇年代から八〇年代にかけての都市空間の経験」とあるが、それはどのようなことか。次の1～4のうちから最も

適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 21。

- 1 街が現代的で洗練された姿に生まれ変わったことにより、感化された人々が最先端の流行を熱心に研究したこと。
- 2 街がおしゃれに演出された場に作り直されたことにより、人々が華やかさによって評価されるようになったこと。
- 3 それまでは取り立てて目立つところのなかった街が洗練され、流行に敏感な人々が集まってきたこと。
- 4 人々の憧れとなるような街が作られ、人々が街に見合った身なりをして理想的な自分を表現したこと。

問五 空欄 B に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 22。

- 1 ところが
- 2 あるいは
- 3 すなわち
- 4 すると

問六 傍線部 f 「華やかな舞台は、過酷な「まなざしの地獄」へと容易に反転する」とあるが、それはなぜか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 23。

- 1 人々が流行を取り入れた身なりをしているかどうかという点に関する他者からの厳しい批判に常にさらされるから。
- 2 人々が他者の目に映った自分を想像することから生じる自分自身による厳しい評価にがんじがらめになるから。
- 3 人々が他者と比べて自分を捉えることで浮き彫りになる自身の劣った部分ばかりに意識を向けてしまうから。
- 4 人々がおしゃれな街に見合う華やかな自分になりたい一心で最新の流行を際限なく追い求めるようになるから。

問七 傍線部 g 「蒸発」とあるが、ここではどのようなことか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 24。

- 1 変化を繰り返すこと。
- 2 新たに浮上すること。
- 3 無事に解決されること。
- 4 跡形もなくなること。

問八 傍線部 h「ネット空間の肥大化」とあるが、これによって「都市空間」にどのような影響があると筆者は考えているか。次の

1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 25。

1 人々がネット空間で自己呈示をするようになることで、都市空間は人々がネット空間で自己を演出する材料を得るための場として利用されるようになる。

2 人々がネット空間に興味を持つようになることで、都市空間は人々の魅力を引き立てる役割を失い、人々が無為に通り過ぎるだけの場へとなり下がる。

3 人々が他者との関係をネット空間で結ぶようになることで、都市空間は人々がアイデンティティを賭けることなくありのままにで気楽に過ごせる場となる。

4 人々が他者と近況を報告しあう場がネット空間に移ることで、都市空間は写真として SNS にアップロードされることが増え、実体と評価が乖離していく。

問九 空欄 C に入る語句はなにか。次の 1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 26。

1 売買と分配

2 交換と保有

3 顕示と隠蔽

4 生成と崩壊

問一〇 傍線部 k「モール化する都市空間は、二通りに評価できるだろう」とあるが、ここから筆者はどのようなことを言おうとしているか。次の 1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 27。

1 都市空間の変容によって、人々の間に存在していた価値観の違いが露呈するということ。

2 都市空間の変容に対する人々の捉え方が、今後の社会のありようを左右するということ。

3 都市の本質をどこに見いだすかは、それをみる人の観点によって変わりうるということ。

4 都市の変遷をたどっていくことで、その本質がどこにあるかが明らかになるということ。

### 問題三

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

現代人は「光り」の世界に住むことを好んでいる。暗い「闇」のなかで四六時中生活するなどということはとても考えられないことであろう。「闇」は人々を恐怖させ、その自由な活動を奪い取る。人々は光りを求め、実際、光り輝く太陽のもとで働き、日が暮れて夜の闇が訪れると家のなかに籠った。これはずっと昔からつい最近まで少しも変わることのない事実だった。もつとも、一部の人は夜が作り出す闇を利用して活動していた。たとえば、夜盗、逢引、夜逃げなどの活動を想起してもらうといいだろう。そうした人々にとっては、<sup>a</sup>闇は人目をさける最良の「装置」であつた。しかし、彼らもまた夜の闇を利用はするものの闇を恐れ、太陽がさんと輝く光るところで活動することを望んでいたのである。

私たちの先祖は、この世界がもつと明るくなるようにと思ひ付けてきた。闇が少しでもなくなれば、働く時間も遊ぶ時間も増えるだろう。そうなればこの世で生きることがもつと幸せに感じられるようになるだろうと信じてきた。しかし、そのころは、闇がほんとうになくなってしまふなどということは少しも考えてはいなかったのである。まして、闇があつての光りであり、闇を恐怖し<sup>b</sup>キヒしつても、闇が私たちの精神生活に必要だ、ということを考えてもみなかったのだ。

私たちはひたすら闇を排除し光りの領域の拡大を積極的に進めてきた。そしていま、私たち現代人は膨大なエネルギーを用いることによって、広大な光りの領域を人工的に獲得し闇の領域の縮小を実現したのである。現代の最良の生活空間とみなされている大都市空間は、夜になつても昼間とそれほど変わることのない明るい光りが輝く空間になつてゐる。それが可能になつたときから、これまでみてきたような都市の闇や農村などの闇に棲みついてゐた妖怪たちは、存亡の危機に直面することになつた。妖怪が棲みえないほどの明るい空間が現出することになつたからである。

一〇〇年ほど前の日本の住居の照明は、<sup>(注1)</sup>囲炉裏の火とロウソクの明かり程度のものであつた。家のなかの至るところが暗い夜の闇に支配されてゐた。

A 戸外の道路には祭礼のときなど以外には、なんの明かりの設備も存在していなかつた。夜道を<sup>c</sup>オウライするための最高の明かりは月明かりであり、闇夜の晩は<sup>d</sup>松明か提灯の明かりが頼りであつた。最近では停電もほとんどなくなつたので自宅でロウソクを非常に常備している家も少なくなつたが、かつて日本人にとってロウソクは大切な日常用品だつた。

たとえば、能登の七浦では、葬式の香典をロウソク代と称している。それは葬式や仏壇用のロウソクを持参するということだけでなく、ロウソクが米と同じように貴重なものであつたことを物語っている。しかし、昭和になり電気が利用できるようになると、ロウソクに代わつてしだいに米や現金になつてくる。電灯の登場は日本文化にとって<sup>d</sup>カクメイ的なできごとであつた。

しかし、電気が通っても、電灯が灯る部屋や場所は限られ、それを維持するに必要な現金の用意も容易でなかった時代もあった。停電もしばしば起こり、近代になっても長く夜の闇は人々の生活を支配していたのである。人々が大量のエネルギーと電気器具によって家のなかの空間をすべて明るい空間に作り変えるようになったのは、高度成長期以後のことである。大都市の繁華街はネオンサインやショーウィンドウの明かりで満ちあふれ、住宅地の街路も街灯が路上を照らしている。いまや夜の闇は制圧されてしまったのである。

**B**、都市部では闇は消え失せてしまった。しかし、山深い山村では、電気こそあるものの、都会ではもはや死語になつてしまつてゐる「**C**」という言葉を肌身をもつて感じさせてくれる深い闇が生きている。こうしたところに出かけて学生たちと調査をするとき、かならずもつていくものの一つに懐中電灯を挙げる。夜に出歩くとき懐中電灯が必要であるという。シユウカンをもたない現代のほとんどの学生たちには、非常用程度のことしか思い浮かばないのだが、調査地に入つて夜を迎えて、初めて私のいった意味を理解することになる。集団で歩いていても、懐中電灯の明かりをすべて消してしまうと、隣にいる者さえまったく見ることのできない漆黒の闇に放り出されてしまうのを体験するからである。そのような闇に包まれた者は、おそらく一歩足を踏み出すことでさえたいへんなことを知るであろう。このとき、学生たちはほんとうの闇に恐怖する。

そうした闇を知る者にとつて、たしかに、明るいことはいいことである。いつでも働ける。いつでも勉強できるし、遊ぶこともできる。移動も容易である。強盗や痴漢も減ることだろう。夜の闇から解放されることで私たちはじつにたくさんさんの自由を手にしたのだ。しかし、その一方で、私たちは毎日の生活の半分を占めていた夜の「闇」の空間を失い、それが生み出していた「闇」の文化を失つてしまったことも忘れるべきではない。それは好ましいことだったのか。私たちが制圧し排除してきた「闇」の文化のなかに私たちの生活に必要なことも含まれていたのではないか。そう問い直してみるのも、けつして無駄なことではないだろう。

私たちの身の回りから「闇」がなくなりだしたのは、いつのころからだろう。地域によつて違いがあるのは当然であるが、文学者の鋭い感性で「闇」の喪失の危機を感じ取った谷崎潤一郎が、『陰翳礼讃』という文章のなかで「私は、われ／＼が既に失いつゝある陰翳の世界を、せめて文学の領域へでも呼び返してみたい。文学という殿堂の檐を深くし、壁を暗くし、見え過ぎるものを闇に押し込め、無用の室内装飾を剥ぎ取ってみたい。それも軒並みとは云わない、一軒ぐらいそう云う家があつてもよからう。まあどう云う工合になるか、試しに電灯を消してみることだ」と書いたのが、昭和の初めのことであつた。もうこのころには、闇の喪失が目立つたものになつてきていたのである。その文章のなかで、谷崎は妖怪の出現しそうな室内の陰翳のある闇について、こう書き記している。

現代の人は久しく電灯の明りに馴れて、こう云う闇のあつたことを忘れてゐるのである。分けても屋内の「眼に見える闇」は、何



かチラチラとかげろうものがあるような気がして、ゲンカクを起し易いので、或る場合には屋外の闇よりも凄味がある。<sup>(注2)</sup>魍魎とか妖怪変化とかの跳躍するのはけだしこう云う闇であろうが、その中に深い帳を垂れ、屏風や襖を幾重にも囲って住んでいた女と云うのも、やはりその魍魎の眷属ではなかったか。闇は定めしその女達を十重二十重に取り巻いて、襟や、袖口や、裾の合わせ目や、至るところの空隙を填めていたであろう。いや、事に依ると、逆に彼女達の体から、その歯を染めた口の中や黒髪の手先から、土蜘蛛の吐く蜘蛛のいとこの如く吐き出されていたのかも知れない。

谷崎が嘆いているのは、「眼に見える闇」の喪失であって、「眼が効かない漆黒の闇」の喪失ではない。燭台や行灯の明かりとその明かりの陰にできる闇とがほどよく調和したところに日本文化の美しさを見いだし、明る過ぎる電灯によつてそうした陰翳のある世界が消失しようとしていることを憂い悲しんでいるのである。すなわち、明かりのない闇も好ましくはないが、闇のない白日のような過度の明るさも好ましいことではなく、光りと闇の織りなす陰翳ある状態こそ理想だというわけである。

谷崎はそこに日本の美の理想的姿を見いだした。しかし、陰翳の作用の重要性はその配合調和の度合いに多少の違いはあるにせよ、美のみではなく、日本人の精神や日本文化全体、さらにいえば人間全体にとつても重要なことだといつていいのではなからうか。

谷崎の文章からもわかるように、光りと闇の、ときには対立し相克し、ときには調和するという関係が崩れ、急速に闇の領域が私たち日本人の前から消滅していったのは、電線が全国に張りめぐらされていた大正から昭和にかけての時代であった。この時代に大正デモクラシーという名のもとに、近代化の波が庶民のあいだにも押し寄せ、その一方で、人々は資本主義・近代的消費社会のシステムのなかへ編入されていたのである。銀座にネオンが輝き、『東京行進曲』が明るい大都会の明るいイメージをアップリアルし始めたころである。そのころから高度成長期にかけて、戦争という緩慢期はあったものの、闇の領域が人々の身辺から消え、それとともに多くの妖怪たちの姿も消え去ってしまったのである。

(小松和彦『妖怪学新考 妖怪からみる日本人の心』による)

(注) 1 囲炉裏……床を四角く切り抜いて、灰を敷いて薪や炭を燃やすようにしたところ。

2 魍魎……山林の気から生じる化け物。

3 けだし……思うに。

4 眷属……同族。

5 『東京行進曲』……菊池寛の同名小説を映画化した際の主題歌で、一九二九年にヒットした。

## 問一

傍線部 a 「聞は人目をさける最良の「装置」であつた」とあるが、それはどのようなことか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 28。

- 1 聞は人目をばばかりる行為をしようとするとする心理をかき立てていたということ。
- 2 聞は人々に内在する恐怖を喚起させるために利用されていたということ。
- 3 聞は人々の目が効かなくなる最も大きな要因であつたということ。
- 4 聞は人に見られたくない活動をうまく隠していたということ。

## 問二

傍線部 b・c・d・e・i と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 29 く 33。

### b 「キヒ」

- 1 祖父がキセキに入る。
- 2 キイな現象が起こる。
- 3 キタイに胸を膨らませる。
- 4 キビキで欠席する。

### c 「オウライ」

- 1 オウボウなふるまい。
- 2 オウネンの名選手。
- 3 オウセツ室に案内する。
- 4 オウゴンの財宝。

d 「カクメイ」

- 1 制度をカイカクする。
- 2 席をカクホする。
- 3 昨年の成績とヒカクする。
- 4 広くカクサンする。

e 「シュウカン」

- 1 カクシュウ月曜日に会議を行う。
- 2 シュウカイ遅れで走る。
- 3 調理ジツシュウをする。
- 4 仏教のシュウハ。

i 「ゲンカク」

- 1 ゲンミツな検査を行う。
- 2 事故の状況をサイゲンする。
- 3 キョクゲンまで薄くする。
- 4 想像と違いゲンメツする。

### 問三

空欄

A

・

B

い。ただし、同じ選択肢を二回選ぶことはできない。次の1～8のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

解答番号は

34

・

35

。

- |   |     |   |     |   |      |   |     |
|---|-----|---|-----|---|------|---|-----|
| 1 | しかし | 2 | すると | 3 | たしかに | 4 | むしろ |
| 5 | もし  | 6 | では  | 7 | もしくは | 8 | まして |

問四 空欄 C に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 36。

- 1 鼻をつままれてもわからない
- 2 闇夜に目あり
- 3 君子危うきに近寄らず
- 4 灯台下暗し

問五 傍線部 f 「調査地に入って夜を迎えて、初めて私のいった意味を理解することになる」とあるが、それはどのようなことか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 37。

- 1 本当の暗闇がいかに恐ろしいものであるかを身をもって知り、都市部は闇が排除された安全な空間であると知ることになるということ。
- 2 都市部には存在しない山村の深い闇を目の当たりにして、夜に出歩くために懐中電灯が必要なのだとわかるということ。
- 3 深い闇に包まれる恐怖を懐中電灯が和らげてくれることで、懐中電灯が非常時以外にも役立つことを学ぶことになるということ。
- 4 山村の深い闇を歩く際には懐中電灯が不可欠であることを知り、筆者と同様に懐中電灯をもち歩くようになるということ。

問六 傍線部 g 「そう問い直してみる」とあるが、どのようなことを問い直すのか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 38。

- 1 私たちが排除してきた闇の空間を、もう一度生活のなかに取り戻すべきではないかということ。
- 2 私たちが制圧してきた闇の空間は、「闇」の文化とならなかの関係があつたのではないかということ。
- 3 私たちは闇の空間を排除するとともに、大切なものまで失ってしまったのではないかということ。
- 4 私たちは闇の空間を制圧することで、本当に自由を手に入れることができたのかということ。

問七

傍線部h「闇」の喪失の危機」とあるが、それは谷崎にとってどのようなことか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 39。

- 1 現代人が生活に電灯を取り入れたことによって、人が心のなかに抱えていた暗い部分まで失われてしまい、いまや文学の世界でしか闇を表現できなくなっていること。
- 2 強い光を放つ電灯が燭台や行灯に取って代わることで、日本の家屋から影がなくなってしまう、光と影のバランスによって作り出される理想的な世界が失われてしまうこと。
- 3 過度に明るい光を放つ電灯が闇を消すだけでなく、燭台や行灯の生み出す影とともにある生活まで奪い去るために、日本人が大切にしてきた精神性が損なわれてしまうこと。
- 4 現代人が闇によって生じる不自由さを解消するために生活に明るい空間を取り入れてきたことによって、漆黒の闇がもつ恐ろしさを知る人がいなくなってしまうこと。

問八

本文の内容として正しいものはどれか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 40。

- 1 暗い「闇」は、それを利用して活動しようとする人々を除いては恐怖を感じさせるものであり、自由な活動を制限するものである。
- 2 能登の七浦で葬式の香典がロウソク代と称されるのは、電灯のない時代から「闇」の文化が大切に守られてきたことの表れである。
- 3 『陰翳礼讃』の文章では、目の効かない凄みのある闇の空間から魍魎や妖怪が出現し、そこに住む女にとりつく様子が語られている。
- 4 大正から昭和にかけて電線が張りめぐらされたが、すぐには安定供給されず、高度成長期にかけて徐々に光が闇の領域を侵食していった。